

石川県七尾美術館だより

平成16年4月1日発行
編集・発行 石川県七尾美術館

第37号(春号)



2



1



4



3

「北大路魯山人展 - 出会いと美の変遷 - 」より

1 織部かすみ網に鳥文扇面鉢

昭和10年(1935)頃

2 色絵雲綿大鉢

昭和26年(1951)頃
吉兆庵美術館 蔵

3 赤呉須汁次「不老長寿」

昭和28年(1953)

4 絵瀬戸草虫文壺

昭和27年(1952)
北村美術館 蔵

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM



展覧会紹介

平成16年4月23日(金)～
6月27日(日)
休館日については裏表紙をご覧ください

「北大路魯山人展 ～出会いと美の変遷～」

4月23日(金)～5月30日(日) 会期中無休

第一・二・三展示室

北大路魯山人は明治十六年(一八八三)に京都市に生まれます。早くに両親と死別し養家を転々とする不遇な幼少期を送りますが、やがて書と篆刻で才能を発揮し、展覧会でも作品が受賞するなど書家として活躍します。

そして三十歳頃より食客として京都や滋賀などを放浪、竹内栖鳳や京都の富豪内貴清兵衛と知り合い、古美術や料理について大きな影響を受けます。やがて金沢の漢学者で数寄人の細野燕台の勧めで金沢に滞在、料亭「山の尾」主人太田多吉より料理を学び、この頃より魯山人が料理に本格的



「染付鯉向附」大正12年(1923)頃



「色絵椿文鉢」昭和13年(1938)
日登美美術館蔵



「伊賀風鮑大鉢」昭和16年(1941)頃

に興味を持ったといわれています。また山代温泉にも赴き、初代須田菁華の窯場で染付や赤絵の絵付を初めて試みています。

大正十年(一九二一)、魯山人は中村竹四郎と共同で東京京橋に美術骨董の店「大雅堂芸術店」を開き、その二階に会員制の割烹「美食倶楽部」を設けます。そこで魯山人の出ず新鮮な料理が大評判となり、大正十四年には赤坂に高級料亭「星岡茶寮」を発展開設する事となり、魯山人にとっては料理と美への才能を更に大きく開化させる事となりました。

やがて「器は料理の着物である」との考えから自ら器の制作を手掛ける様になり、初代宮永東山や荒川豊蔵といった陶芸家達と交友し、それぞれの技術を吸収して自らの作風を形成していきます。そして昭和二年(一九二七)に北鎌倉に「魯山人窯芸研究所星岡窯」を開設して荒川豊蔵を招き、本格的な作陶を始めると共に、古窯址の発掘、研究を行いました。



「良寛詩・竹林図」(左隻) 昭和25年(1950)



「桃山風漆絵椀」 昭和19年(1944)頃

昭和十一年(一九三六)、経営の問題で中村竹四郎と激突し、星岡茶寮を去る事になりますが、その後は陶芸に専念し、備前の金重陶陽や藤原啓なども広く交友しながら、備前・志野・織部・色絵などの古陶磁を深く研究し、慣習にとられない自由で奔放、創意に満ちた作品を制作しています。昭和三十年には重要無形文化財保持者(人間国宝)の認定を受けますが辞退、最後まで我流を貫き、昭和三十四年(一九五九)に七十六歳で没しました。

魯山人は書画から陶芸、料理に到るまで幅広い分野で制作活動を行い、類い稀な自己の芸術世界を構築しました。傲慢不遜で型破り、常に独善的といわれる魯山人ですが、その芸術観の確立には多くの人々との「出会い」、影響がありました。そこで本展では「出会いと美の変遷」をテーマに、書・篆刻・絵画・陶芸・漆芸などの作品計一六九点を幅広く展示します。そして書家・篆刻家として世に出た「食客時代」から、料理人・陶芸家として活躍する「星岡茶寮時代」「星岡窯時代」の三つの時代を通して、各時代に魯山人が出会った人と彼らから学んだ美を紹介します。

これらの作品を通して、石川県ともゆかりの深い魯山人の、妥協を決して許さない芸術に対する純粹な想い、優れた審美眼を感じ取って頂ければ幸いです。

本展期間中の5月16日(日)、当館館長による特別講演会を開催いたします。詳しくは四ページをご覧ください。



「暗香盆上による」昭和初期～10年代頃 (1926～44)



「備前手桶花入」昭和28～32年頃 (1953～57)

観覧料

	一般	個人	団体
大高生	700円	350円	600円
			300円

中学生以下無料・団体は二十名以上です。

「第60回記念現代美術展 七尾展」

6月4日(金)～27日(日)

第一・二・三展示室

「現代美術展」は石川県下で最大規模を誇る公募展です。その歴史も古く、戦後間もない昭和二十年十月に「美術文化の向上による新日本建設への寄与」をスローガンとし、記念すべき第一回展が開催されました。以後、毎年継続され今回で六十回目となります。

本展は県内在住の重要無形文化財保持者(人間国宝)や日本芸術院会員を筆頭とした、現代の美術界を牽引する作家作品をはじめ、これから更なる制作活動をしていこうという新進気鋭の作家まで、幅広い層から出品・応募されています。展示は出品委嘱作家作品に加え、入選率五〇パーセントという厳しい審査を経た作品、合計約千点が選ばれています。

これだけの作品を一堂に鑑賞できる機会は貴重であり、石川県における現代美術の流れを展観する絶好の機会といえるでしょう。

七尾展は昭和二十一年六月の第二回展が開催された後は、平成七年四月の当美術館開館を機に、毎年、能登地方関連作家作品を中心に展示し、「現代美術展」の地方展という形で開催され、今年で十回目を迎えます。

昨年の「第59回展七尾展」では金沢展展示作品九八六点の中から、二一六点を厳選し展示しました。今年も「現代美術展」展示作品の中から、能登地区(押水町以北)在住者の作品、最高賞・次賞・委嘱賞受賞作品、能登地区在住および出身委嘱作家作品、財団法人石川県美術文化協会役員の作品を選抜、日本画・洋画・彫刻・工芸・書・写真の六部門で約二百点を展示予定です。



「第59回現代美術展 七尾展」

主催(予定)

後援(予定)

七尾市・財団法人七尾美術館
財団法人石川県美術文化協会
北國新聞社・テレビ金沢・ラジオななお

能登地区各市町村教育委員会

観覧料

	一般	個人	団体
大高生	500円	350円	400円
			300円

中学生以下無料・団体は二十名以上です。

アートホール催し物案内

ファミリーコンサート

4月25日(日) 開演 午後1時
 「『なんで僕にピアノ習わせてくれなかったん?』と、幼児の時にバイエルの【上】でピアノをやめた中学生の息子が、一度だけ出演した発表会のことを忘れて言いました。」
 息子が、毎日CDを聞きペーターベンの「月光」を仕上げたのに驚き感激した、ある家族の話です。私たちのささやかな発表会の中から、音楽を楽しむ芽が育っていた事がとても嬉しいです。皆様のご来場を心からお待ちしております。

入場料 無料
 主催 ひびき会・琴絵会・洋三会
 連絡先 川崎 幸子
 ☎〇七六七(五二)四六五七

当館主催の催し・アートホール

◇映画上映会◇【入場無料】

毎月第2・4土曜日 午後2時

- ・4月10日・24日・5月8日・22日
 「荒川豊蔵と志野・瀬戸黒」(25分)
- ・6月12日・26日
 「日本の美術工芸」(28分)

◇「北大路魯山人展」特別講演会

日時 5月16日(日) 午後2時
 演題 「魯山人の人と作品」
 講師 当館館長 嶋崎 丞
 聴講無料

問合せ先 石川県七尾美術館

☎〇七六七(五三)一五〇〇

石川県七尾美術館友の会 催し物のご案内

駐車場から当館をつなぐ通路の桜並木の枝も蕾がふくらみはじめ、まもなく開花しそうです。冬の降雪時にはこの通路と駐車場の除雪作業に泣かされる(ひと汗かかされる?)のですが、そんな季節も終わり、満開の桜トンネルができるのももうすぐ!楽しみですね。

さて、この春からのうれしいニュース、当館友の会会員証の提示で『能登島ガラス美術館』でも観覧料の割引がうけられるようになりました。同館では、四月二十二日から春季テーマ展「Glass Flowers(グラスフラワーズ)」と題して花をモチーフにしたガラス作品が展示されますので、ぜひ足を運んでみてください。

ここで、今年度友の会会員対象の催し物をいくつかご紹介いたします。各催し物の参加募集に關しましては、ハガキや美術館便りの同封文書等で個別にご連絡いたします。このほかに、「こんな催し物があったら…」などありましたらお気軽にお聞かせ下さい。

「北大路魯山人展」・「長谷川等伯展」
 列品解説 (各会期中一回)

第五回 美術館友の会鑑賞の旅

日程 六月中旬の日曜日
 見学予定地 県内美術館施設等
 参加費 五、〇〇〇円程度
 募集定員 先着四十五名
 【対象は原則として成人】



美術品取扱講座「はじめての古美術」

(「冬季・所蔵品展」会期中一回)

ボランティアの部屋へようこそ!

Vol.3

今回は開館当初からのボランティア、高崎さん。七尾美術館で毎年秋に開催している、イタリア・ポロニヤ国際絵本原画展での出来事です。

再会

高崎千賀子



途切れることのないお客様から、「S寺の奥さん」と。
 私の第二の故郷、福井県大野市。住職と十三年、住職亡き後も、優しく力を貸して下さったご夫妻と、お嬢さんの姿に吃驚、懐かしく目が潤みました。

「図書館でポスターを見て急に出て来たの。ポロニヤの絵と、奥さんに出会い幸せな一日でした。来年は図書館友の会の方達と、ポロニヤを見に来ますよ。」

それからは手紙の往復、電話、そしてついに昨年十一月、大野の皆さんとの再会が実現しました。ポロニヤ展を観に来て下さった二十六名のお客様、「私覚えてる」「息子が日曜学校でお世話になったの」「あゝ、俊君のお母さん」私は大野ムード一杯の中に居ました。

「楽しくて有意義な一日を有難う」「今度は家族とお伺いします」「来年のポロニヤには来ますよ」「今度は大野でお会いしましょう」と、嬉しい言葉を残されて帰られました。

監視ボランティアを始めて九年。思いがけない心暖まる数々の出合い再会、心の財産を沢山頂いたことを励みに、ボランティアを続けたいと願っています。この再会に職員皆様の、お力添えを戴きましたことに感謝申し上げます。合掌。

平成十五年度

新収蔵品紹介

平成十五年度中に、新しく当館の所蔵品になった作品・資料を紹介します。

①洋画「春影」 佐々波啓子

平成十四年(二〇〇二)制作
第88回光風会展 光風奨励賞
佐々波啓子氏より寄附



②洋画「椅子の女」 南政善

昭和四十五年(一九七〇)制作
改組第二回日展
大岩(南)志賀子氏より寄附



③日本画「善女龍王図」 長谷川信春(等伯)

室町時代末期頃(十六世紀)制作
七尾市が購入

9/18~10/24 「長谷川等伯展」に出品予定



④絹本版完全復刻掛軸

「七字題目」「日蓮聖人像」「釈迦・多宝仏図」
「鬼子母神・十羅刹女図」「三十番神図」
高岡市大法寺住職 栗原清皇氏より寄附

「七字題目」以外は長谷川信春(等伯)作品



写真は「日蓮聖人像」絹本版完全復刻掛軸

等伯コーナー

長谷川等伯展特別講演会報告

「新しい絵画の時代」

スライド編

講師 黒田泰三氏(出光美術館学芸課長)

次、お願いします(「竹虎図屏風」アップ)。これも猫のような毛触りといいたまじょうか、体毛の表現は抜群です。さっきの鳥の雛鳥と同じような薄墨と濃墨の使い分けは、完璧といつていいと思います。

次、お願いします。今ご紹介しました、最近見つけた鳥と白鷺、虎という二つの作品に非常に強く認められるのは、やはり情愛表現だろうと思います。そうしますと、情愛表現というのは何も二点に限ったことではなくて、鶴の(「竹鶴図屏風」右隻) 瞼の線が下にカーブしているところにも、ものすごく幸せな鳥の顔が、また口元も微笑んでいるように見えてくるんです。多分、これから生まれてくる子どもに夢見て、母親になろうとしている雌の幸せな一瞬というふうに見えるんです。これも見事な情愛表現だと思えます。

次、お願いします(「観音猿鶴図」)。近年見つけた作品を加えて、彼が動物を描いた五十歳代の代表作

群を概観しますと、間違いなく非常に体温を感じるような情愛が描かれているかと思えます。じゃあ、何がきっかけでこつこつ絵を描くようになったのか、きつと原因があると思うわけです。次にそれを考えてみます。記録はありませんが、これまでも言われている通り、等伯は天正十七年頃に大徳寺に入りを始めて、その頃「観音猿鶴図」を実際に見たと思われまふ。これは現在三幅対で、真中に観音様がいます。

次、お願いします。向って右側に猿の絵があります。これは、先程から見ております猿の親子(「竹林猿猴図」と同じ状況です。一本の大木にいます。

次、お願いします。向って左側に今度は鶴がいます。これは出光本の鶴の絵と全くいっしょですね。

この絵を、まず間違いなく見たと思えます。画家が絵を見るといふのは芸術体験だと言いましたけれども、この絵を見て等伯は、自分の作画活動に一体何を発見しようとしたのか。今ご紹介した幾つかの動物をこの後に次々と描くわけで、ということは、この絵から何か得ているはずなんです。私なりに推測しますと、この牧谿の絵には岡倉天心以来、非常に有名な解釈が沢山あります。「観音と猿と鶴とによって、禅宗という宗教観を通じた世界観が表されている」と、かなり抽象的ですけども、それが統一した見解です。最近、宮城学院女子大学の内山さんや東京大学の小川さんは、これはどうやら母親としての母性が共通してるんじゃないかと言います。つまり、白衣観音様を真中に置くことによって、実際に子どもと別れてしまった現実、それから子どもといっしょにできる幸せという現実、その相反する子どもに対する母性を観音によって繋ぎ止められている、或いはもたらされているという解釈が近年打ち出されまして、私は大変魅力ある解釈だと思います。そういう、土台(土壌)は中国絵画全般に言えることですが、哲学的なテーマが根っこにあるんです。私は、世界観や宗教観というものを彼は見取ったとは思いますが、むしろ、やはり母性と

いったものをこの絵に見抜いたんだと思うんです。それでこの絵に、観音の元に母性の象徴である猿の幸せと、不幸の象徴である鶴を自分のモチーフとして引用し、みんな幸せな解釈に変えてしまっただけです。猿の一家団欒であったり、鶴の番の幸せだったりというふうには、やっぱり等伯は牧谿の「観音猿鶴図」を見て、哲学的な思索をしたというよりも、日本人が非常に好む情感表現をヒントにしたのではないかと思います。もし、私の解釈が正しければ、当時にあって、画家が情感を表現するということは、非常に珍しいと思います。それは、もちろん色々な状況が考えられますが、一番考えられるのは等伯の人間性だと思います。動物を描いて、情感或いは情愛を表現するというのは、よほど優しい人間性がないと、描けないと思うんです。知識や教養で絵を描くのが、当時の画家としてはメインの仕事です。特に狩野派の絵を見ますとよく分かりますが、そういう、つまり仕事として絵を描くという領域には、絶対表れてこない芸術性だと思います。それは多分、何よりも等伯の人間性がそういうものより勝っているからだと思えて仕方がないのです。いずれにしても、牧谿のこの絵から何らかのヒントを得て、ご覧に入れたような絵を次々と描いたということは、間違いのないと思います。

次、お願いします。これは、牧谿本を見て描いた龍泉庵の「枯木猿猴図」で、そっくりですね。一本の大木のところに親子がいます。ところが、牧谿画の方は緊張しているわけですよ。ひと抱きしめているんですけども、等伯のはごうやって肩車をして遊んでいるという、非常に和やかな雰囲気に変えているわけですよ。次、お願いします。これは「竹鶴図屏風」、大きなも始どいつしよです。ところが、牧谿と等伯の鶴のディテールを比較すると、やっぱり表現技術は牧谿の方に重配が上がります。けれども、多分等伯自身が一番分かっていたと思います。自分は、恐らく表現技術は牧谿に及ばないと。だから彼は、牧谿の絵にはない

解釈を、自分の絵の中へもたらそうとしたんだと思います。哲学的な、もしくは宗教観、世界観を意識して牧谿が描いたとしたとすれば、そういうテーマではないもつと肌触りを感じるような情愛、情感というテーマで、意図的に分かりやすく描いたという気がします。次、お願いします。例えば、日本で虎の絵というと不思議とみんなこういふポーズをとります。これはその大本になったと思われる、牧谿が描いたと言われる大徳寺の虎の絵です。多分、日本の水墨画家たちは虎を実際に見ることはできなかったため、みんなこの絵をコピーするわけです。

次、お願いします。牧谿画を見て描いたと思われる、大徳寺聚光院の狩野松栄が描いた虎の絵です。全く同じポーズですね。日本人が桃山から江戸時代にかけて描いた虎の絵は、みんなこういふポーズです。ですから、等伯の虎の解釈がいかに斬新かというの、比較してもすぐ分かるかと思えます。

次、お願いします。それから、当時の狩野派による虎が数頭描かれている絵には、必ず豹が一頭描かれています。「虎の子渡し」という話があつて、狩野派はどうも、そういう中国のお話を元に描いていると思えるんです。つまり、実感表現ではないんです。実物をもちろん見てないし、要するに知識や教養で絵を描いているんです。ですから、必ず豹が一匹交さるという、中国のお話をそのまま描くのです。等伯は、五十歳代にはそういう豹を交じえた虎の絵は描きませんが、六十歳代になると描くようになるんです。

次、お願いします。これは名古屋城玄關の襖です。慶長十九年の制作と言われ、狩野輿以が描いたという説と、最近では狩野長信という説があります。狩野派の虎というのは「虎が嘯けば風が起きる」という、まさにそういう獐猛さです。こういふ虎の表情が、もしくは牧谿のああいう座った虎が、当時一番ポピュラーな描き方でした。しつこいようですが、だから等伯の虎の絵がいかに他の虎とは違うかということですよ。

次、お願いします。今度は、等伯の中で時代を違え

て比べてみます。これは、ボストン美術館の「龍虎図屏風」の拡大図です。これは図版からの複写で、筆のタッチという微妙なニュアンスはつかつには申し上げられないのですが、少なくとも虎の横縞のこの線の描き方とか、細い毛の描き方というのはかなり硬質です。硬い、触ると怪我をするくらい硬い感じですよ。ちよつとスライドを戻してください（出光本）。ところが五十歳代のは、こんなに柔らかいんですよ。

次、お願いします（ボストン美術館本）。それが六十歳代になると、すごく激しい感じになります。龍虎という組み合わせで、これは龍を睨みつけ、かなり獐猛な虎の解釈になってしまっています。十年前程の、ああいう非常に愛くるしい、愛すべき猫のような虎とも違い、彼の中でもかなり絵が変わっていくんです。

次、お願いします（群虎図屏風）。これは法眼落款がある屏風一対で、虎が戦っています。左隻の方に、狩野派と同じように豹が一頭交じっています。名古屋城の、狩野派の虎と非常に近い雰囲気があります。それから、毛のタッチはボストン美術館本と非常に似たものがあると思えます。今、虎を比較してきましたが、どちらが芸術的に優れているかということではなくて、五十歳代の虎の方には、当時誰も試みなかった非常に斬新な解釈があるということ、お分かりいただけるのではないかと思います。

次、お願いします（松に鴉・柳に白鷺図屏風）。実は鳥も五十歳代と六十歳代に描いています。これは五十歳代の鳥です。一家団欒のいい雰囲気ですね。次、お願いします。これは川村記念美術館の「烏鷺図屏風」で、空中戦をしている鳥たちです。これは、かなり獐猛ですよ。傷ついて墜落しようとしているのを、脇から狙っているわけです。これも法眼落款ですから六十歳代後半以降で、少なくとも一家団欒のああいう和やかな雰囲気は、とうに消え去っています。

次、お願いします。ディテールを比べますと、これが川村本の鳥です。こちらは墨をベタ塗りなんです。多分、漆が何かを混ぜていて非常に光沢のある

墨色で、べったりしています。ところが、五十歳代の方は羽が透けて見えるような、そういう微妙なニュアンスまで非常にうまく描いています。つまり解釈にも違いがあるし、したがってこういう表現にも微妙な違いがあるということが言えるかと思えます。

次、お願いします。白鷺も同じです。これは川村本で、一見非常に似たような白鷺ですが、目のところの表現が違います。川村本の目の拡大図を見ると、瞳があつて、ちょっと前後に点々とするのがあるんです。

次、お願いします。出光本は、この曲線を入れて点打っています。前後の点と相俟って、睨がちゃんと表現されているというか、表情があるんですね。川村本は、ちょっとその辺が微妙です。

だから、何が言いたいかといつと、さっきの虎と白鷺という、幸いにも五十歳代と六十歳代という十年間の間を置いて描いた、二つの全く同じモチーフの作品を比べていくと、間違いなく五十歳代の方が動物の愛らしさを表現しようとする制作態度が、非常にはっきりしていたということなんです。今回の一番のテーマである等伯の描いた動物画を、特に近年発見された作品を加えて概観して分かる大きな一つの芸術性・問題点は、「情愛を描く」という、同時代の画家も等伯自身も後に取上げなくなってしまうテーマであるということなんです。これは、時代的に言って松林図の前後な瑞々しい解釈の動物を描く絵の実情と、どうやってそれを考えついたのかという、牧谿の絵から何を得たのかというところに対する、私の推察を申し上げます。

それから、この展覧会は実はもう一つ大変なテーマがあります。この屏風です（波龍図屏風）。今から五年くらい前、山根先生と本法寺で見せてもらったんです。それを今回修理して展示されると伺って、大変うれしく思っております。落款もハンコもないのですが、例えば龍の鱗の描き方が、濃淡の墨の使い分けというのが絶妙なんです。似た絵は、後で宗達、宗雪に出てきますが、ちょっと雰囲気は違ふんです。こ

れは、本法寺というお寺にあるということも考え合わせて、「等伯じゃないか」と先生がおっしゃって、私も「そう思います」と申し上げたんです。淡墨の面の上に、濃墨の線で鱗を描いていくという墨の濃淡の使い方は、やはり先程の五十歳代の虎の毛の表現に共通する技法だと思います。だから、これは等伯に間違いのないと思います。多分、墨のその諧調の感じから五十歳代だと思つんですが、そうしますと、新たにまた動物を描いた絵画が出てきたということなんです。

更に、美術史研究においても非常に重大な意味を持っておりまして、この図柄、この構図は、実は東京国立博物館の俵屋宗雪筆と言われる龍の絵とそっくりなんです。それから、アメリカのフリア美術館に宗達の代表的な龍の絵がありまして、ちょっと構図は違つんですが、絵の雰囲気は非常によく似ています。宗雪の作品が、この等伯の絵と構図が非常にそっくりだということは、年代的に考えますと、俵屋宗雪はこの絵を見た可能性があるわけですよ。つまり、琳派、俵屋宗達及びその周辺の画家たちが、この絵を見た可能性があるということなんです。日本の長い美術史の中で、日本で水墨画を自立させたのは間違いなく等伯の「松林図屏風」で、それをさらに日本人的にもつと形を整えていったのが、俵屋宗達だと言われているわけです。そうしますと、宗達は日本の水墨画を定着させたという言い方ができると思ふんですが、この絵が宗達たちのお手本になったということがもし言えるのであれば、等伯が宗達に影響を与えたということも言えるわけで、そうなりますと問題は非常に大きな意味を持つてきます。今まで、等伯と宗達の関係は、技法の共通点は指摘されることはあつても、直接の関わりなど指摘されることはなかったんですが、この本法寺の作品によって、これは非常に重大な問題を提起するのではないかと思つています。この能登、金沢という、宗達、宗雪の関連と等伯ということはもちろん無関係ではないし、やはり等伯の与えた影響というのは、ただ

レパートリーが広いというだけではなくて、斬新な解釈で情愛を感じる動物の絵を描いただけでもなく、実は宗達に影響を与えたかも知れないという、もっと重要な影響も十分に窺い知ることのできる画家だったということにもなると思ふんですね。これは、私のこれからのテーマになると思います。

次、お願いします。最後ですが、これは虎の尻尾のところなんです。こういう筆の色々な技法の使い分け、尻尾のところまで可愛さが感じられる描き方です。つまりどういふことかと最後にまとめておきますが、情愛を描くというのが当時はいかに難しかったかということとを再認識しておきたいのです。狩野派は絶対そういう絵は描きません。それから、宗達以下の琳派の絵には、情愛を感じる絵があるんですけども、実は等伯の絵が影響を与えていたと考えることもでき、それはつきつめると画家等伯の類い稀な瑞々しい感性そのものだと思ふんですよ。そうしますと、その瑞々しい感性を実際に絵に表すという、もつと言えば人間性がそのまま絵に表れるということとは、この時代の、近世初期の日本の絵画史にあつては、有り得ないことなのです。自分の感性を絵にする、若しくは自分の人間性を絵にするというのは、江戸時代も半ばになつてからなんです。ですから、初期の時代にあつて等伯という人は、実はそういうのをいち早く自分の絵の中に取り入れていたんです。これが、今回の展覧会の作品を見て一番感じる、等伯の画家としての一面、イコール人間性だと思ふんです。非常に優しい、懐の深い人間性がそこに表れているんじゃないかという気がします。それは、やがて江戸時代半ば以降、日本の画家たちもみんなが表現するようになるわけですが、そういう非常に類い稀な新しい絵を等伯が描いたとすれば、いわゆる新しい時代の幕開けは、実は等伯によって切つて降ろされたんじゃないかということがいえると思ふんです。ちょっと思えばかりが先走つてしまったような感じですが、どうもご清聴ありがとうございました。



これからの展覧会予定



第1・2展示室

「池田コレクション選抜展」

平成16年7月3日(土)～8月15日(日)

当館では毎年、夏の時期には当館所蔵品の展示を中心に行っています。本展ではその所蔵品の中核である「池田コレクション」から茶道美術品及び、近現代の日本画などを紹介します。

七尾市名誉市民の故池田文夫氏が収集した志野や織部などの陶芸品、氏が在住した岐阜県にゆかりの前田青邨や熊谷守一などの作品で構成される「池田コレクション」より、それぞれの優れた作品をお楽しみください。



「砂張鉦」初代 魚住 為楽

第1・2展示室



「舞台」山本 隆

「夏季・所蔵品展」

～画家たちの視点～・～造形の魅力～

平成16年8月20日(金)～9月12日(日)

当館所蔵品及び寄託品を紹介する「所蔵品展」です。今回は2つのテーマで展示します。「画家たちの視点」では日本画・洋画における画家が見つめた対象に注目し、彼らの視点を追います。「造形の魅力」では彫刻を中心に、エネルギーに満ちた造形をお楽しみください。

第1・2展示室

「長谷川等伯展～能登時代の仏画と北陸の長谷川派～」

平成16年9月18日(土)～10月24日(日)

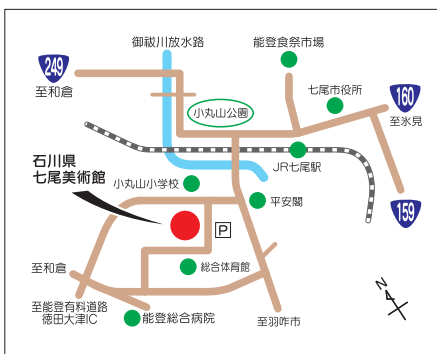
平成8年度より毎年開催している「長谷川等伯シリーズ展」です。9回目となる本年は、能登時代の活動を見直す意味で等伯(信春)の仏画を中心に紹介、また北陸地方に現存する長谷川派の作品を、初公開作品も含めて紹介します。

【写真：重文「三十番神図」(部分) 長谷川信春(等伯) 高岡 大法寺】



第3展示室

同時開催：「秋の所蔵品展～草花の表現～」



交通案内

- 飛行機……能登空港より能登有料道路利用約45分
- 車……………金沢より能登有料道路利用約1時間20分
- タクシー…JR七尾駅より約5分
- 徒歩……………JR七尾駅より約20分
- 市内循環バス…JR七尾駅より西回りに(まりん号) 乗車約6分
(午前9時～午後4時の毎時30分発)

休館日のお知らせ

(4月～6月)

4月 5、12～22

5月 31

6月 1～3、7、14、21、28～30

◎次号・第38号(夏号)は7月3日発行予定です。